

第187回 番組審議会

1. 日 時 平成21年11月10日(火) 12:00～
2. 場 所 メトロポリタン盛岡NEW WING 11F「ギャラクシー」
3. 委 員 委員総数 13名
出席委員数 8名(欠席委員数 5名)

○出席委員(敬称略)

中村 慶久(委員長)
椎井 一意(副委員長)
—以下50音順—
斎藤 雅博
東海林 千秋
中川 真
中原 祥皓
八木橋 伸之
吉田 浩次

○会社側出席者(6名)

佐藤 滋樹(代表取締役社長)
小原 忍(専務取締役)
藤澤 利憲(常務取締役)
前田 秀男(取締役編成技術局長)
一戸 俊行(報道局長)
工藤 哲人(報道局 報道部)

○事務局 村田 重昭

4. 議 題 mit スーパードキュメント「台温泉を県大生がプロデュース」
平成21年10月31日(土) 16:00~16:30放送

5. 議 事 概 要

今回は、mit スーパードキュメント「台温泉を県大生がプロデュース」について審議しました。

各委員からは「大学の単位がなくても参加している学生たちの熱意が伝わってきた」、「見ている学生たちを応援したくなった」、「埋もれている地域の魅力を活性化に結び付けていくことが大事だと感じた」など番組を高く評価する意見がありました。

また、一方で「地域とのしがらみがない学生たちには、もっと積極的に発言してほしい」、「参加しなかった旅館も多かったが、なぜなのか最後までわからなかった」という意見がありました。

さらに「今後、どうなっていくのに興味がある」「これからも継続して取材をしてほしい」などの要望がありました。

6. 議 事

○事務局

ただいまより第187回番組審議会を開催いたします。

本日まで出席の委員は8名、ご欠席は久慈委員、斎藤純委員、菅原委員、村上委員、役重委員の5名です。

今回の議題は、10月31日(土)に放送されました、mit スーパードキュメント「台温泉を県大生がプロデュース」です。本日はプロデューサーの一戸報道局長とディレクターの工藤報道部員が出席しております。

それでは、中村委員長よろしくお願いたします

○中村委員長

まず、一戸さんと工藤さんから今回の番組の背景などについてご説明をいただきたいと思っております。

○一戸局長

mit スーパードキュメントは、報道部から番組を積極的に発信していこうということで、昨年度立ち上げました。昨年度は地ビールのベアレン醸造所の従業員が亡くなったタンク破裂事故から再開されるまでの道のりを描いた番組と、環境問題で負の遺産でもある松尾鉦山の跡地を緑に変えていこうという取組みを描いた番組の2本を制作しました。

今年度は春に1本制作をしようと思っていましたが、花巻東高校の春の甲子園準優勝の特別番組を制作することになったため、今回の「台温泉を県大生がプロデュース」が今年度としては1本目のmit スーパードキュメントとなります。

制作したのは入社7年目の工藤哲人で、普段は県政記者クラブのキャップをしています。工藤は去年放送しました松尾鉦山の番組も担当しました。今回の番組はニュースの企画を撮り溜めて膨らませたものです。どちらかというとなewsの延長線上に番組があったという感じになっています。今の経済状況の中で、台温泉への応援歌という気持ちと、地域活性化のヒントを探れるような番組になればと思って制作しました。

今回はカメラマンが番組制作を担当するのが初めてだったり、制作時期に他の番組と重なるなど厳しい部分もありましたが、何とか無事放送できたと思っています。年末には今年度の2本目として、陸前高田市を舞台に地域の誇りを賭けた運動会や祭りなどを描いたドキュメンタリー番組の放送を予定しています。今日はさまざまなご意見を伺いまして、今後の番組制作に生かしていきたいと思います。

○工藤ディレクター

報道部の記者として取材しています。去年からの世界的不況の影響で、県内も厳しい経済、雇用情勢となる中で、何とか岩手県の明るい経済の話題を見つけて報道したいと思っていました。その中で、これから成功を目指して頑張っていこうという台温泉のプロジェクトに出会いました。

普段から、地域貢献を目標に掲げている岩手県立大学の学生がたくさん参加するというので、良い結果を期待して取材を開始しました。その様子は夕方のニュースの中で5分程度の企画ものとして3回放送しました。それを番組として一本化する形で、ひとつのドキュメンタリー番組としてまとめました。

番組の中で一番の盛り上がる部分は、台温泉の旅館の方々と県大生の学生たちが本音で議論するところです。私の胸に響いた場面のひとつでした。視聴者にもダイナミックな議論

を感じてほしいと思いましたが、そこをメインにしました。私としては、両者の意見が分かるだけに難しい状況でしたが、何かをしなくてはいけないという方向で番組を作ろうという結論に至りました。結果として“まず、できることからやっ払いこう”ということで、県大生と旅館の方々が、同じ方向に進むことが出来て良かったと思いましたが。

放送後も台温泉のプロジェクトは現在進行形です。先週、事業組合の設立総会が開かれて、“みんなで湯めぐりをやっ払いこう”“白金ロールを共同販売していこう”など、いろんな事業の実現化に向けて組合を立ち上げることが決まりました。プロジェクトは18軒中5軒の旅館でした。このプロジェクトの番組を見ていただいたせいかどうかは分かりませんが、1軒参加する旅館が増えて6軒になりました。興味をもってくれた旅館も3軒、4軒あるそうです。失われてきていた地域のつながりが、復活するきっかけになっているようです。今回は半年間のプロジェクトで県大生の役目は終わりました。2～3年生の若い学生が多かったため、これから自分たちに何ができるのか、来年何ができるかを自主的に話し合っているようですので、期待して見えています。来年以降、台温泉に女性客が集まるような賑やかな温泉街になっているところを、取材してお伝えできるように、今後も継続して追っていきたいと思っています。

○中村委員長

さっそく意見をちょうだいしたいと思います。中川委員お願いします。

○中川委員

ちょうど1年前の番組審議会から参加させていただいています。私が初めて参加した時も工藤さんが担当した松尾鉦山の番組でした。地域の活性化の問題に、工藤さんが継続的に取り組んでおられ、同業者として参考にさせていただくことも多いと思っています。

台温泉には2回ほど泊まった事がありまして、1回目は番組にも出てきた炭屋さん、もう1回は安い宿で、たぶん18軒の中でプロジェクトに参加していないところだと思います。外から見て感じる温泉街の一番の問題は、表現が適切ではないのかもしれませんが、勝ち組、負け組みが鮮明になっていて、地域全体の中でうまくいっていないように見えます。

今回、大学生という外の人たちのパワーを借りて、地域を活性化しようという取り組みは面白いと思います。それを継続的に取材されたことは良いことだと思います。

印象に残ったシーンは腹を割った話し合いの中で、大学生から「若い人からの意見として聞

いていただく程度で結構なんだ」というところでした。ちょっと弱気で情けないなと思いましたが、その後みんなで頑張っ、最後は「嫁入りしたい」という女の子も出てくるまでになりました。地域に関わることは、本腰を入れてやらなければいけないということが番組の中で伝わってきました。

こうすれば良かったと思ったことは、郵便局長の女性が出てきたところです。その女性はホームページで、温泉の種類によって分けることをやっていたが、ここでやろうとしている“湯めぐり”ということにも合っています。それをホームページで分かりやすくまとめていたが、非常に優れた人だという印象がありました。ご本人の発言や、大学生の取組みをどのようにその女性が見ているか、もう少し掘り下げてもらおうと第三者の目でプロジェクトを見られたと思いました。

本当に知らないこともたくさんあって、楽しくそして勉強になった30分間でした。

○中村委員長

それでは、八木橋委員お願いします。

○八木橋委員

総論的に見ると、若い人と現場の経営者が議論していて面白かったです。勝ち組、負け組みという話しもでしたが、客層のターゲットをどこに絞るかということが議論の中で出ていませんでした。

今、有名になっている温泉地の由布院は、別府に修学旅行などのお客を取られてきた昭和30年代に、危機感をもった若い人たちがドイツに行き、長期逗留型の温泉をめざしました。あの時期にそういうことをやって、有名になるまで20年ぐらいかかっています。今でこそ由布院は有名ですが、“離れ”を作ってそれを回廊で結び、1週間、10日ほど長期滞在をさせる形式は、当時他にはなかったものです。

台温泉は狭い川沿いの土地で逗留型をやるのか、観光型をやるのか。せつかく経営学の先生が出てきたので、何か言ってほしかったと思います。

木造の古い温泉旅館の建物が出てきましたが、銀山温泉と比較するとどちらが古いのかなど、知りたいと思いました。

案として出てきた「湯めぐり」や「温泉の歴史パネル」はどこの温泉でもやっていることです。あの議論だけでは他の温泉とあまり変わらないことになってしまいます。どのような

プラスワンを出すのかまで議論してもらえると、楽しい番組になったと思います。

最後に事業組合の話ができました。仕事上の差し障りがあるので、詳しいコメントは差し控えますが「事業組合は非常に難しい」と思います。

あとはめんこいテレビで継続的に取り上げてほしいと思います。

○中村委員長

斎藤雅博委員お願いいたします。

○斎藤雅博委員

非常に厳しい経済状況の中、明るい前向きな取組みを報道するというので、台温泉を取り上げたのは非常に良かったと思います。景気は気分の「気」です。気持ちで負けているところがあるので、私も前向きな姿勢を見せる事が非常に大事だと思います。

私は高校が花巻だったので分かりますが、昔は台温泉もけっこう繁盛していました。花巻温泉がホテル化し近代化されて、その奥の台温泉の影が薄れてきたということは感じていました。まだ18軒もの温泉宿があるとは思っていなくて大変驚きました。そういう意味で地域活性化の対象として相応しかったのだと思います。

いろんな企業に学生が関わることはこれまでもあったと思います。ここまで本格的に関わった事例は私も記憶にないので、非常におもしろい取組みだと思いました。番組のメインが議論のところだったということでしたが、私も興味深く見させてもらいました。

杉村さんをはじめ全ての経営者の方は、これまでもいろいろなことをやってきたと思いますが、なかなか連携や協力ができなかったのでしょうか。今回の学生や中小企業団体中央会の猿川さんや山本先生が場を作ったことで、方向性が見えてきたのではないかと思います。その過程が非常に大事だったのではないかと思います。

今回、事業組合を立ち上げるころまで来たのは、これがあったからということです。八木橋委員からは「これから難しいかもしれない」という意見をお聞きしましたが、ここまで来たことだけでも評価できると思います。

台温泉のホームページを見て、まとまりがあって、工夫の跡が見られたのではないかと思います。新メニューの白金ロールは美味しそうだったので、ひとつの目玉になるのかなと思って見ていました。

番組の最後で学生が、「探せば地域の魅力はたくさんある」と話していました。私もそうだ

と思います。それをいかに発掘して、いかに地域活性化に結びつけ、事業化していけるかが、非常に大事だと思います。誘致企業を引っばってくるだけの地域振興ではなくて、今ある資源をいかに有効に使っていくかが、大事な観点ではないかと思います。そういった活動に県立大学の学生たちが参加したことは“生きた学問”ということで良かったと思います。学生は、大学では学ぶことができない社会のことを多く学んだのではないかと思います。県立大学は地元の大学です。かなり県の税金を使っている中で、中には批判的な見方をする方もいます。ぜひ、こういう形で地域の取組みにどんどん参加して、ある種地元貢献もしていただくことが、県立大学の認識にもつながることではないかと思います。

出来ればこの後どうなったのか、ということもフォローしていただきたいなと思いました。

○中村委員長

学長としては、地域貢献はどうすればいいかと思っているところです。一部の学生の活動を今回取り上げてもらいましたが、いろんな学生が地域貢献に意外と取り組んでいます。そういうことをこれからも報道で取り上げてもらえればありがたいと思います。

次に、中原委員お願いいたします。

○中原委員

どなたか郵便局の女性のことが仰っていました。この郵便局は民営化で一回潰れました。再開してこの女性が来たこともあり、私は印象に残っている郵便局でした。たまたま台温泉に一泊した翌朝にオープニングをやっていました。今、改めて思い出すと再開の時に引っばってくるほど能力のある局長さんではないかと思い、改めて応援したいという気持ちになりました。

県立大学の学生さんたちが単位なしで参加している。打算のない若者の素晴らしさを改めて感じました。若者の前向きな気持ちが、画面にずいぶん現れていたという思いがします。私も日常、学生に接する機会があるので“若いという事はいいものだ”ということ、この番組で改めて見させてもらいました。

最初、18軒の旅館があつて5軒しか参加しなかったということで、“なぜそうなのか？”ということが、一番気になっていました。その部分が最後まで出てきませんでした。そこで事業組合は難しいという八木橋委員のご意見に「なるほど」という思いもしました。なぜ18軒のうち5軒なのかということが、ずっと気がかりでした。事業組合を作ることになり、1

軒増えて6軒になったことはいいですが、“難しい”から避けるのではなく「なぜ参加できないのか」ということを少しでも見せていただければ、地域活性化の難しさがある程度わかるのではないかと思います。活性化のために、地域が一体にならなければならない時になれない。むしろそちらの方が問題ではないのか、という思いがします。

一方では、この番組の趣旨として県立大学の学生さんたちの熱意というものを全面に出しています。もう一方では、地域活性化というのは容易ではないという事情がある。しかしながら何とかしなければならぬ。結果的に「容易ではない」という結論を出してもらっては困ります。何か見通しのありそうなものを番組で出していただければ、もっと先を楽しみに番組を見終わることができたと思います。

18軒の旅館全部が事業組合に加わる訳ではないということを取り上げれば、もう一つの問題提起になるのではないかと思います。しかし、そのことによって活性化の動きをつぶすことにならないよう、いろいろな取り上げ方の工夫が必要ではないかと思います。見終わってさらにその印象を強くしました。

学生たちの活動はどの場面をみても「ガンバレよ」と応援したくなりました。旅館の人たちと言い合いをしている場面でも、「若者、ガンバレ」という思いで見させてもらいました。

斎藤委員も仰ったように、花巻温泉との比較になると、余計にうらぶれた印象になってしまいます。そこから脱却しようということで、今回のプロジェクトが始まったのだと思います。温泉の魅力は豪華な食事やいろいろありますが、台温泉の“温泉”そのものの良さを番組でもっと強調してもらえれば、テレビを見た人も「行って見ようか」という思いがするのではなかったかと思います。

30分番組でしたが、事業組合や女性郵便局長の話題を含めて、いろいろな要素を組み合わせてありました。古い写真なども出てきて退屈しないで見させてもらいました。いい意味で時間が経つのが早く感じられる番組でしたが、難しい問題を今後どうやってクリアしていくのかをもう少し見せてほしかったという思いがしました。

○中村委員長

東海林委員お願いします。

○東海林委員

私は材木町にある専門学校で教員をしております、マーケティングも教えています。材

木町の青年部にも所属しています。県立大学の学生たちが材木町の「よ市オンライン」のホームページを作ってくれていますが、青年部としても県立大学の学生たちといろいろに関わりながら材木町の活性化に取り組んでいます。そうした関わりの中で思うことは、学生たちはユニークな意見は出してくれるけれども、こちらが期待するほどのことは難しい。あとは学生たちの意見をプロがどのようにコーディネートしていくかという部分が非常に重要です。

活性化させるため、マーケティングで一番大事なことはターゲットを絞ること、そしてポジショニングをはっきりさせて、自分たちと他との差別化を図ることです。せっかく経営学の先生が出ているわけですから、そこをはっきりさせるべきだと思います。「函館にお客さんを取られる前に」と仰っていましたが、台温泉は函館に行くような観光客を迎え入れようと思っているのか？ あるいは花巻市内のお客を呼びたいのか？ 盛岡のお客を呼びたいのか？ どういう方向性に行くのかわからないままスタートしているように思えました。

私は台温泉に実際に行ったことはありませんが、木造4階建ての素敵な旅館があったり、鳴子温泉に負けないくらいたくさん源泉があります。であれば岩手県内でももっと違う形の差別化、ポジショニングを打ち出すやり方があると思います。

温泉まんじゅうは有名ですが、白金ロールはどうでしょうか？ その場で温かいうちは美味しいと思いますが、お土産として買ってもらえるかと考えるとどうなのでしょう？ せっかく県立大学の学生たちがいろんなアイデアを出しても、それをこれからどのように料理をするか、旅館の人たちの活躍が期待されます。

誰かがきっかけを作らないと人とのつながりは生まれません。材木町もこの後どうしようかという時に、県立大の学生たちが関わってくれたことで、「こんなに頑張っているのだから私たちも頑張ろう」ということになったことがありました。今回、県立大の学生たちが授業でなくても「やりたい」といって集まってくれたことは、すごく良かったと思います。それをきっかけにしながらどうやって地域の人々のつながりを作っていくかが、これからの台温泉の発展に関わってくると思います。

先月も志戸平温泉のコマーシャルの話をしました。昔、台温泉のホテル三右エ門のコマーシャルを見た事があります。アワビもびっくり！ などというコマーシャルもありました。温泉のコマーシャルを見て、子供心に「いつか行ってみたい」と思ったことがあります。

マーケティングの4Pはプロダクト、プロモーション、プライス、プレイスです。台温泉のプロジェクトがしっかりできたら、今度はプロモーションだと思います。最近ではホテルや温泉のコマーシャルを見ませんが、そういう意味でコマーシャルを流したり、「山・海・漬」

で取り上げてプロモーションしたりして、何か私たち岩手県民がもっと台温泉のことを活性化させていく手立てがあると思います。

プロモーションがあって初めてお客さんが来てくれると思います。台温泉がもっといい温泉街になってほしいと思いながらテレビを見させてもらいました。

○中村委員長

吉田委員お願いいたします。

○吉田委員

台温泉については、4～5年位前に盛岡市内で口コミでかなり話題になりました。台温泉にすごくいい所ができたよ。昼食だけでもわざわざ食べに行く価値があるよ、というものでした。その頃2回ほど行きましたが、その時の印象は古いものを大変うまく生かして、玄関周りなども演出をうまくしていました。まるで京都の高級なところのようで、非常にいいなという印象を受けました。

今回、議題が「台温泉を県大生がプロデュース」という番組だったので、県大生がはたしてどんなプロデュースをするのだろうか？これはおもしろい題材だと期待して見ました。

私の感想としては、工藤さんからディスカッションのところは迫力があつたというお話がありました。正直なところ私はあの場面を見ていて非常に盛り上がり感が少なく感じました。しがらみのない学生ですから、もっと斬新なアイデアが出てきてもいいのではなかったか、と思いました。むしろ先生が前もって「こんな切り口もあんな切り口もある」ということを、学生たちに吹き込む材料が少なかったのではないかと思います。あの場面はもっとバトルがあつて良かった、事前の掘り下げの部分が欠けていたというのが率直な感想です。

今回の導入部分については、20万人も訪れたところが、急に6万人とかなり悲惨な状況になってきている、ということでした。ドキュメントとして今、台温泉が他の温泉にお客さんを取られている。その原因は何なのか。悲惨な状況についてももっともっとクローズアップしていただきたいと思いました。岩手であれだけの歴史のある台温泉がここまで落ちた。「今、その問題は何か？」ということをやまずクローズアップして、その上で県大生にプロデュースさせるという繋がりがほしかったと感じました。

テレビの中でブレインストーミングをさせることは、よほど下準備がないと会話にはならないと思います。今回のプロデュースの中ではそこが最大の見せ場だったのだと思います。

その最大の見せ場が少し薄まっていたと感じました。

地元の企業・産業の中では、まだまだ疲弊し困り果てているところがたくさんあります。そういうところを吸い上げて、学生さんたちの授業とうまく絡ませて研究させる。こうした番組は非常に大事なことだと思います。今後、ますますこういうものには挑戦していただきたいということをお願いします。

○中村委員長

椎井副委員長お願いいたします。

○椎井副委員長

この夏にインターネットの広告を見て、台温泉のやまゆりの宿に泊まってきました。宿も温泉街もあまり印象には残っておりません。こういうプロジェクトが進んでいるということを知りませんでしたので、大変興味深く見させていただきました。千二百年の歴史と伝統を誇る温泉街の旅館の経営者と、台温泉の名前も知らない、行ったこともない大学生が、トレンディー感覚と斬新なアイデアで活性化のお手伝いをしようというプロジェクトが進んでいるわけです。やはり伝統を守ることと、これを打破しようとする攻防が見られました。

これは台温泉だけの問題ではなくて、全国ほとんどの温泉街に共通する課題だと思います。活性化に向けて議論をしている結果よりも、この過程が大事だと思います。ここに大きな期待をかけるのではなく、伝統を守る人たちと新しい学生さんたちが同じ土俵で議論することに意義があると思います。結果としてその先がどのようになるのかは、旅館経営者の責任でもあるはずですが、新しい考えや物を導入する、現状を変えることは経営者にとってかなり勇気のいることです。今回のテーマは学生が主役になっていますが、逆の見方をすると旅館の経営者が主役ではないかという見方もできるわけです。本来ならば旅行代理店や経営コンサルタント、常連のお客様の声を聞けばいいことです。あえて学生をプロジェクトに参加させた勇気を大いに評価したいと思います。

勇気の裏返しには相当な危機感もあったのだらうと思います。台温泉の旅館の経営者たちは心の広い、キャパシティがあるなと思いました。学生の声聞くというのは、伝統と歴史を守る人たちにとっては我慢も必要です。学生の意見はしがらみがないので、純粹さと素朴な気持ちでいろいろなアイデアを提供してくれると思います。もうひとつ、学生さんたちは未来のお客さんたちです。未来のお客さんを醸成するという意味では、学生たちをプロジェ

クトに招き入れたことは成功だったのではないかと思います。こういう場をもって議論をしたことが、将来の台温泉の発展に必ず結びつくのではないかと思います。

地産地消ではありませんが、台温泉は地元の方々が利用しないとなかなか発展に結びつかないと思います。花巻温泉とのシナジー効果を求めていった方がいいのかもしれませんが。台温泉という名前だけではなくて、外の人からすれば花巻・台温泉とか、そういうことを考えてはどうでしょうか。

参考までに全国の地域ブランド調査という県や市町村の認知度、魅力度の調査があります。岩手県は全国で29番目です。盛岡市は全国で103位。1位は函館です。2位は去年1位だった札幌です。3位は京都。そういう意味で台温泉も花巻温泉のブランドを利用した形で発展していくのも一つの方法だと感じました。

○中村委員長

私にとって、大学の参考になる意見をたくさん頂戴したと思います。「台温泉を県大生がプロデュース」という題名を付けられたために過大評価されて、厳しいご意見も出てきたので、学生たちがすこし可愛そうだと思いました。簡単にボランティアのつもりで参加したのではないかと思います。

県大生と旅館の人たちとの議論の部分は、大変おもしろいと思いました。特に杉村さんは台温泉の代表、オピニオンリーダー的な人としていろいろと発言されていました。私も若い頃いろいろな提案をすると、会社や企業の方はたくさん駄目な理由を言ってその意見を潰されたことを思い出しました。

ホテルの里ももう少し前向きの発言があれば、意外といいアイデアになるかもしれません。“駄目だ”という議論だけをしてしまうと、2～3年生の学生はみんな黙ってしまいます。「県大生だからもっと理論的に言え」といわれても何の知識もありません。卒業研究ならば話しは別ですが、おもしろ半分で参加している学生たちが多いと思います。そこで「じゃ、いいわ」と言ってケツをまくって帰ってしまうのかもしれない。特にそう言われた時に彼らがどう返すか？あの時にどれぐらいの議論があったのか？もう少し議論があれば映してもらっても良かったと思いました。

最後は「私達が入ったことが活性化のきっかけになればいい」と女の子が話を納めてしまいましたが、そこがおもしろかったです。学生を見ている立場としては「学生の方がもしかしたら1本取ったのかもしれない」という感じがしました。大上段に振りかぶったところ

をさっとかわして納めてしまった。それがきっかけで前向きな方向に進んだということで、番組としては大変おもしろく作っていただいたと思います。

若い人たちは、感性や思い付きで物事を言いますから、そこを大人がどう受け止めて、あとは自分たちでどのように処理をしていくかが一番大事なことです。学生の中から本当に興味がわいてくれば、もっと真剣に考えてくる人が出てくるはずです。私はむしろそれを期待したいです。もしそうになりましたら、また取り上げていただければと思います。

白金ロールも番組のひとつの目玉でした。白金ロールよりも白金花(花巻)ロールの方が良かったと私は思いました。台温泉であれを提供する意味は何でしょう？ 昼にたまたま行った人が食べるのでしょうか？ 材料としては非常におもしろいですね。花巻駅とか盛岡駅で台温泉の名物として、お客を引き込むための売りとして出すというのも一つの考え方だと思います。もし量産できるのであれば、白金ロールが台温泉発のおもしろい名物になり、盛岡駅でも食べられて「これおいしいね」という話しになるかもしれません。

私も“昔は確かに台温泉があったな”と名前を思い出したくらいです。よく見るといい素材があるのではないかと思います。ホテルがいる綺麗な流れは、散策路に誰も行かないからほったらかしになっている。昔風の雰囲気のある宿や新しく改装した宿もある。全体としてうまく統一的にやれば魅力のある温泉、どちらかという都会の人が行って“癒しの里”としての魅力がある温泉なのかなと、テレビを見ながら想像しました。

今後、地元の方々がマーケティングとか、売り込みの方法とかを考えてうまくやっていただければと思います。花巻温泉のような大きなホテルとは違う、こじんまりとした宿、温泉の良さを楽しもうという都会人はたくさんいます。そういう人たちを引っ張ってくるような可能性があると感じました。どこまで出来るか今後が楽しみです。せっかく県大生が関わりましたので、今後どのように変わって行くのかが一番心配です。

私どもの大学はボランティアを盛んにやっていて、地元との関わりを一生懸命やろうという学生がたくさんいます。教員も巻き込んで県のいろいろな課題に対して具体的な提案していくことや、単なる学生のボランティア的な感覚だけでなく、もう少し学問的に取り上げていく気風を、県立大学として作っていきたいと思います。大変、私にとっては勉強になり、最後まで有意義に見させていただきました。

それでは、他にご質問はございませんか？

○中川委員

なんで女子大生の方は浴衣を着ていたのでしょうか？誰か準備されたのでしょうか？

○工藤ディレクター

受け入れ側のメンバーの方が準備されました。温泉街を歩いて回るという雰囲気をつくるための演出です。そういう意味では、白金ロールは温泉街を歩きながら食べるというイメージがあって開発されたものです。

白金ロールは冷凍できるので、旅館の前で“せいろ”で蒸して売り、その湯気で温泉の雰囲気づくりをしたいというような意図があるようです。

○中村委員長

ありがとうございました。

それでは続きまして、欠席委員からのレポートがあれば、事務局から報告をお願いします。

○事務局

欠席された久慈委員、斉藤純委員、村上委員からレポートが届いています。

○久慈委員レポート

この企画自体が斬新で、過疎化している温泉街を若い大学生が本気で何とかしようとしている姿が上手に表現されていたと思います。

地元の方々も 100%ウエルカムではなく、どこかで意見の対立があるのは当然で、それをよく映像として映せたと思いました。普通カメラが入っていると、対立するような意見は言いにくいのですが、今回は自然な姿を映像にしていたので、その辺も良かったと思います。

出来れば、このプロデュースの結果がどのような形で残ったか、今後も追跡取材をしていただければうれしいです。お客さんが増えたとか、そういった変化をぜひ報道で追いかけてみてください。

○斎藤 純委員レポート

番組に出てくる「かみや」の蕎麦を食べに、台温泉には何度か行ったことがあります。残念ながら温泉に入ったのはこの十年で一度くらいしかありません。この番組を見て、いつか泊まりに行きたいと思いました。

台温泉では景観保全のNPOが県の助成金を得て、景観点検や改善を2年か3年続けて行っています。外から見えるプロパンガスのボンベを、お金をかけずに囲いをつくって隠すというようなことや、花壇をつくるなど、実践的な方法のアドバイスをしていますが、地元の人が継続しなかったのも、また荒れてしまったと聞いています。今回のプロジェクトを機に、地元の人がちゃんと立ち上がってくれば、少しは持ち直すんじゃないかと思います。

県立大学の学生は、社会参画が進んでおり、私が主宰する盛岡自転車会議にもこれまでに何人かの学生に関わってもらってきました。大学生が「まちづくり」に関わるなんて、私が学生だったころは、考えられなかったことです。

学長がいらっしゃるからゴマをするのではなく、私は講演などでも、学生の社会参画の意味を、県立大学の学生から教わったと公言しています。素晴らしいことだと思います。

ところで、ナレーターが白金ロールを「ファストフード」と言っていたのですが、これは誤用ではないでしょうか。あれは決してファストフードではありません。立派なスローフードです。あのコメントを書いた方は、県立大学の学生を見習って、もう少し勉強してください。

○村上委員レポート

閉塞感にあえぐ温泉町の活性化を目指して立ち上がったプロジェクト。県立大生の若者らしいまっすぐさと、常識や旧弊の殻をなかなか破れない大人のぶつかり合いが、非常におもしろかったです。確かに日帰りよりは宿泊のほうが利益になるでしょうし、ホテルの里と歌うのはリスクも大きいでしょう。日々シビアな現実に立ち向かう大人の方が逆ギレしたくなるのもわかります。

でも、「わかっちゃいるけどなかなかできなかった」ことへの風穴を開けるきっかけになることにみんな少しずつ気づき始め、同じ方向に向かって歩き出したあたりから、また新しいシーンへと展開。ドキュメンタリーなのに、まるでドラマのようなちょっと感動的な展開でした。

作りは全体的にテンポよく、いまどきの女の子ファッションをしっかりと決めた県大の女子学生の笑顔やストレートな言葉がよく生きていたと思います。厳しい現実はあるながらも、新しい道が拓けつつあるというエンディングにホッとしました。ただ、96歳のおばあちゃんがひとりでやっている水上旅館はどうなるんだろうと、それだけが少し気になりましたが、「このとおり今日はお客さんはひとりも来ないよ」といいながらも宿を開けるくらいですから、きっと大丈夫ですね。

○中村委員長

ありがとうございました。

これで本日の番組審議委員会を終了させていただきます。

○事務局

ありがとうございました。それでは本日の番組審議会をこれで終了いたします。

なお、今回の審議会の模様は11月21日（土）朝4時42分から「めんこいテレビ番組審
リポート」として放送いたします。

12月は恒例により休会となり、次回は年明け1月12日（火）に開催となりますので、
よろしくお願ひ致します。

7. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

8. 審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

*平成21年11月11日（水） 産経新聞 東北版

* 平成21年11月21日（土）午前4時42分から4時45分まで「めんこいテレビ
番審リポート」内で放送

* 据え置き書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

9. その他の参考事項

特になし